

alt. ca. 750 m (S. Serizawa no. 18842, July 1973); Kurasawa, Nippara, alt. ca. 650 m (S. Serizawa no. 16553, Sept. 1972). All specimens are deposited in the Herbarium of Aichi Kyoiku University, and the isotype specimens are in KYO, TI and TNS.

### 引用文 献

Baker, J.G. (1887), *Handbook of the Fern-Allies* 31-123. 小泉源一 (1935), 植物分類地理 4: 220-230. 松村任三 (1904), 帝国植物名鑑 (上) 360-363, 396. 田川基二 (1957), 植物分類地理 17: 16. van Alderwerelt van Rosenburgh, C.R.W.K. (1912), *Bull. Jard. Bot. Buit. sér.* 7: 30-31.

□R. J. Pankhurst (ed.): **Biological Identification with Computers.** 333 pp., Academic Press, 1975. £20.25 (¥ 7,480)。1973年に行なわれたシンポジウムのまとめで、電子計算機を同定の手段として利用する問題に関し、16編の論文が収められている。電子計算機を用いて「分類」を行なうことは既に20年以上の歴史があるが、いまだに分類学の中に定着したとは云えず、その有効性に疑問を持つ人が少なくない。筆者もその一人である。その最も大きな理由は、形質の評価の基準がないために、いかに精密な処理を行っても従来のわくを越えることができないことがある。そのためには分類学に計算機を導入することは、特にわが国では異端視される傾向がないではない。

しかしながら、分類体系を組立てるという目的とは別に、種の同定作業の道具としての計算機の有用性は、はかり知れない将来を持っている。同定の手段として従来用いられて来た検索表は、論理的な同定法とはとても云えるものではなく、また標本のもつ限られた形質に応じた同定経路を選択することもできない。我が国の高等植物のフロラに関する成書は、既にいくつも出版されているにもかかわらず、同定についてはいまだに多年の経験に基づく名人芸に頼らねばならないのは、有効な同定手段の開発が期待されていることの裏返しに他ならない。このためには従来一緒にして考えられてきた分類 (Classification) と同定 (Identification) を分離して、互にリンクをとりつつ別個な努力を傾注する必要がある。そして Identification の分野に於ては電子計算機の最大限の活用によって、従来にない飛躍が期待できる。これらのことは筆者の意見ではあるが、本書の中でも多くの論者が触れている点である。

まず、Historical Introduction と Survey の項目の下に、従来の同定手段の変遷と展望について概説されている。次の Techniques は10編の論文を含み、自動同定に関する理論的、技術的问题が論じられている。微生物に於ては、特に病原性微生物の迅速な同定は、社会的な要求もあって開発が進んでおり、計算センターに蓄積されたデータ

とソフトウエアを利用して、遠隔地からの自動同定が行なえるようなシステムが紹介されている。高等植物の自働同定システムとしては、イギリスの Cambridgeshire 地区の *Rubus fruticosa* 類縁種群を電算機と対話しながら同定するプログラムが紹介されている。このシステムは学生教育用の小規模なものであるが、電算機が提示する形質群を手許の標本とくらべて選択して、同定範囲をしづって行けるようになっている。

*Taxonomic Data for Identification* には 2 論文が含まれ、一つは北米のあらゆる頬花植物を同一の検索システムにのせる為に、すべての種の形質を同じ形式で記録する Flora North America Program の書式が解説されている。このプログラムは検索のみでなく植物誌の自動作製をも意図したものである。これなどは莫大な予算と期間、それにすべての分類研究者の大きな苦痛（苦労だけではなかろう）の結果なされるものだろう。もう一つの論文では従来の記載文を自動同定のデータに作りかえるうえの問題点が述べられている。他に Statistical Theory, Teaching の項目で各 1 編および Discussion があり、最後に文献目録、関係ある電算処理プログラムの目録、自動同定に関する用語集がつけられている。

このシンポジウムが行なわれてから既に 5 年が経過しており、今日の電算機関係諸技術の急速な進歩を考えると、当時の future の多くは実現されている筈であり、この研究分野は遠からず最も活発な動きが期待される。我が国の分類学は系統、進化に重心がかかりすぎ、同定という多分に技術的な面はとかく軽視され勝ちであり、事実この方面的研究者は一人もいないと云っても過言ではない。同定という仕事は学説と違って、よそでいくら発展していても我が国でそれをとり入れるわけにはゆかない。特に同定のもととなるデータベースの作製は一朝一夕にできるものではなく、また研究者ばかりでなくアマチュア多数の努力にもまたねばならない。分類に理解をもち、この方面に関心をもつ若い研究者の出現を期待したい。

（金井弘夫）

□ピーター・コーン： 安部薰(訳)： 花の文化史 pp. 215+7, pls. color 8 (1978). 八坂書房、(東京) ¥3,200。著者は 1910 年にスコットランドに生まれ、第二次大戦中は南西太平洋方面連合最高司令官の副官としてインド、エジプトに従軍、その後は園芸雑誌の編集に従事した人。はじめの部分は大体三部になっていて、英國の本草家を中心として草木の取上げ方の変遷を語り、中程で植物を描いた画家にふれ、最後に 18 世紀以後の採集家達と栽培にうつした園芸家達の行動にふれている。リンネの標本を買った英國の軍艦をスエーデンの軍艦が追いかけたのはうそであるとか、植物の最初の正確な描写はふつうメムリング「祈る人」(1490)を挙げるが、じつはもつと古くギベルテ(1378-1455)の筆になるとか新しいこともでてくる。それが終ってツバキ、カーネーション、クレマチス、アイリス、ユリ、モクレン、シャクヤク、ケシ、サクラソウ、バラ、チューリップ、スマレ、スイレンの 13 の代表的な栽培種をえらんで述べ、適当と思われる品種を説明し、それらに関する文章や逸話を語る。面白いが少々煩雑、若干の誤りもある(たとえばシデコブシが富士山の斜面にあるなど)。それにページの下方 2/3 にのみ組み上 1/3 をあけて図版を入れる様式がここ数年はやっているが全部で二十ページ強の白くあいているのも気になる。全体として従来の花の文化史を一步でたるものといえよう。

(前川文夫)